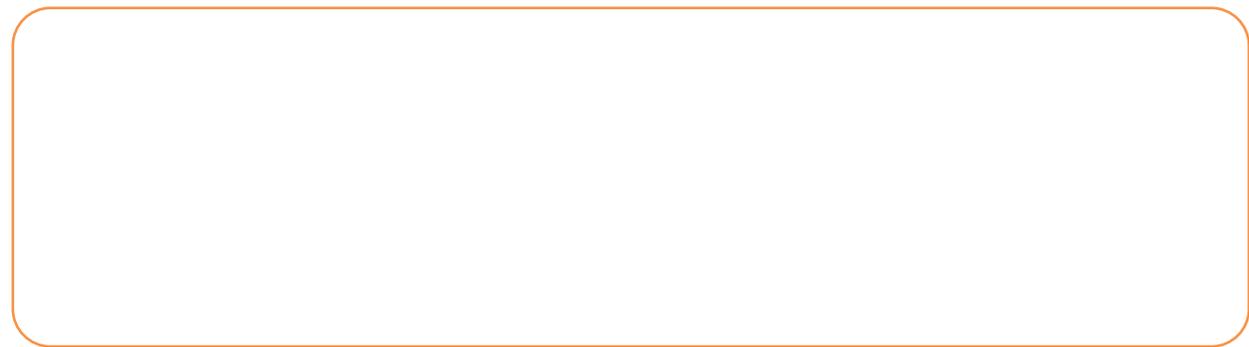


いま、あなたにできることが、
いま、地域に必要なこと、
安心・安全な
福祉のまちづくりをめざして

地域を住みよいまちにするためには、
皆さんひとりひとりの理解と協力が必要です。
「ちょっとだけ」の力をぜひ地域へ…!!

お問い合わせは下記の社会福祉協議会まで…



このリーフレットの作成にあたっては、高津成和会助成金を一部活用しています。



ふれあいネットワーク

社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会

〒542-0065 大阪市中央区中寺1-1-54 大阪社会福祉指導センター内
TEL : 06-6762-9473 FAX : 06-6762-9487
ホームページ <http://www.osakafusyakyo.or.jp>

今、地域で起きていること

～小地域ネットワーク活動をはじめる前に～

○社会関係や人間関係の希薄化

以前はどの地域でもあったご近所の助け合いが、核家族化の進行や、生活スタイルの変化に伴い、失われつつあります。所得や家族などの生活基盤が不安定になったり、壊れたことをきっかけに、地域社会からの孤立に至るケースが少なくありません。



今、改めて、向こう三軒両隣が声をかけあい助け合うなど、お互いさまの関係づくり「近助」の精神が必要とされています。

あなたの地域に、こんな方おられますか？

夫の介護に悩んでいるおばあちゃん

仕事がうまくいかず、ひきこもり状態のお兄さん

自宅に帰ってもひとりぼっちの子どもさん

子育てに不安を抱えるお母さん

認知症の妻を介護する認知症の旦那さん など...

○公的サービスだけでは限界

在宅の場合には、要介護の状態であっても、24時間専門機関が対応し続けることには限界があります。専門機関と住民が手を結び、要介護者が制度の狭間に埋もれないような取組みが求められています。

○いざという時、力を発揮するのが地域のつながり



平成7年、兵庫県を打撃を与えた阪神・淡路大震災。倒壊した家屋の下から被災者を救い、ため近隣の助け合いが大きな力となりました。普段から、地域のヒトと想いをつなぎ、育てているからこそ、いざという時にも大きな力が発揮できます。

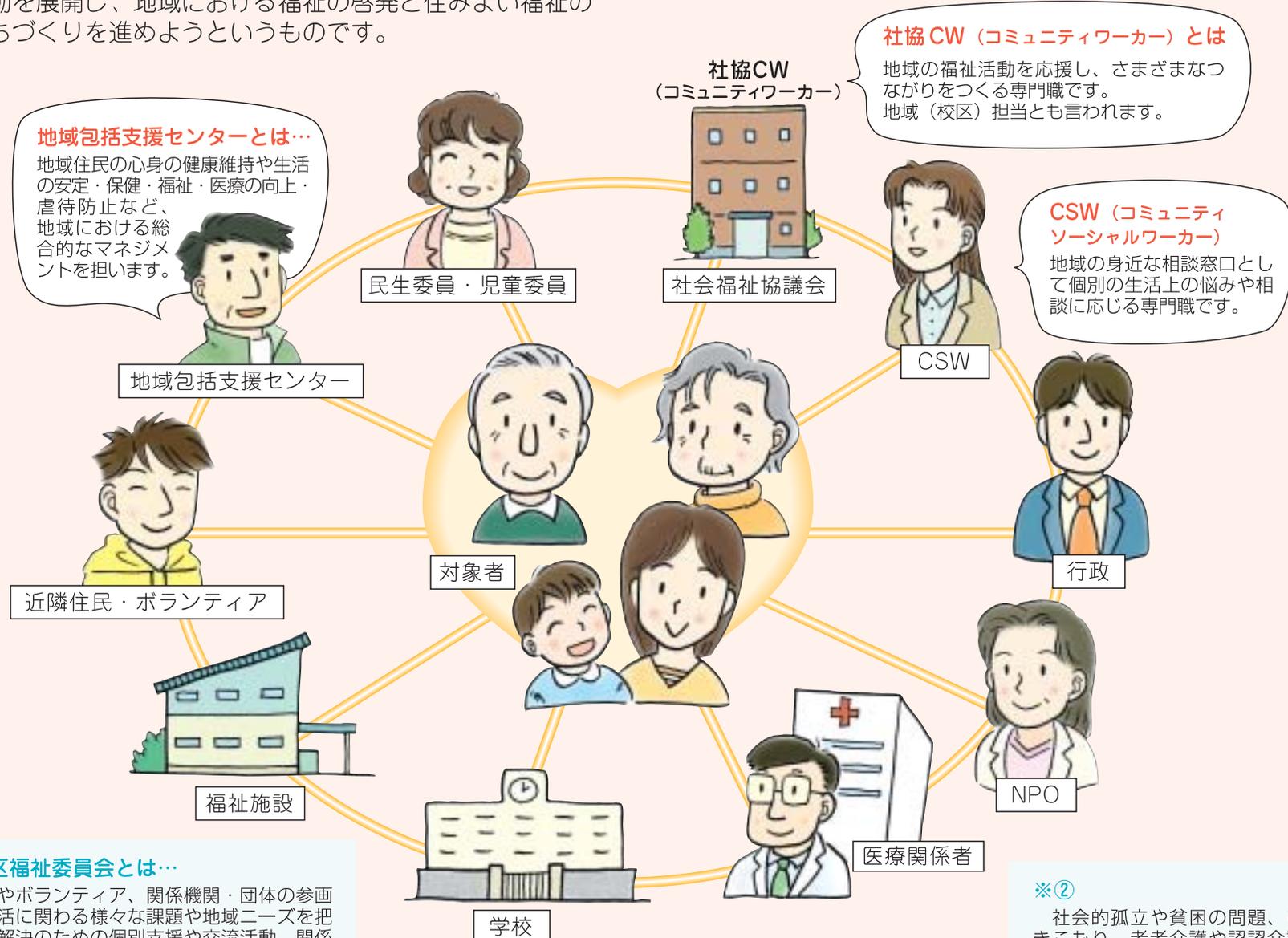


●今こそ求められること●

- ◎見守り活動の重要性に改めて焦点をあてながら、地域性に応じた新しい展開や、多様な主体（当事者や福祉施設等）との協働・連携による場を充実させていくこと。
- ◎こうした地域の課題や状況に気づき、自分にできることに取り組み、続けていくこと。

小地域ネットワーク活動とは…

小地域（概ね小学校区）を単位として、地区福祉委員会（※①）を中心としながら要援護者一人ひとりを対象に、保健・福祉・医療などの関係者と住民が協働して進める、見守り・援助活動です。地域の高齢者、障がい（児）者、及び子育て中の親子など（※②）が地域の中で孤立することなく、安心して生活できるよう地域住民による支え合い助け合い活動を展開し、地域における福祉の啓発と住みよい福祉のまちづくりを進めようというものです。



※①：地区福祉委員会とは…

地域住民やボランティア、関係機関・団体の参画により、生活に関わる様々な課題や地域ニーズを把握し、その解決のための個別支援や交流活動、関係機関等との連絡調整や広報啓発等を行なっています。その重点的取組みのひとつが小地域ネットワーク活動です。（地区社協・校区福祉委員会ともいう）

※②

社会的孤立や貧困の問題、ひきこもり、老老介護や認知介護といった課題を抱える、日常的な支援・見守りを要する人々が増えています。

見守り・声かけ訪問活動

支援を必要とする人に対する見守り、安否確認、声かけ訪問

- 新聞受に新聞等がたまっていないか
- 洗濯物が何日も干されたままになっていないか



個別援助活動 いろいろ

小地域ネットワーク活動は、当事者の抱えている問題の解決をめざすものです。日常的・継続的な個別援助活動を基本としながら、当事者のニーズを早期発見し、可能な限り未然に防止することが大切です。

日常的な生活支援活動

草刈・電球交換・ゴミ出し、散歩や通院などの付き添い、買い物、掃除・洗濯等といった簡易な身の回りの支援を行う



配食サービス活動

食事の用意が困難な人を定期的に訪問し、栄養バランスのとれた食事を提供するとともに安否確認を行う



災害時要援護者支援に関する活動

日常的な個別援助活動を通じた災害時における要援護者の把握



●新しい見守り 活動の広がり●

緊急時安否確認(かぎ預かり)事業

ひとり暮らし高齢者の家の鍵を施設で預かり、様子がおかしいと思われるときに、その鍵を使って家屋内に入り、安否確認ができるしくみ。孤立死をなくしたいとの想いから、社協と地区福祉委員会、社会福祉施設の協働によって実現しました。

普段の声かけや見守り活動を丁寧に行っているからこそ、敏感な気づきにつながっています。



見守りネットワークの構築

地域内の商店や事業所等との連携により、住民の異変に早期に気づき、対応できる支えあいのしくみ。例えば、毎週決まった曜日に来店するおばあちゃんが数週間来られない。お話しする際の会話がかみ合わなくなってきた。など、“気になる”方がおられる時には、社協へ連絡が入ります。住み慣れた地域で誰もが安心して生活するための、地域連携による取り組みは府域でも広がりを見せています。



子育て支援

子育て中の親子が集まり、ボランティアとともに遊びを通じて子どもの成長について学びます。また、子育てについての交流活動、相談活動、保育士や保健師の協力を得ながら育児相談も行います。



グループ援助活動 いろいろ

公民館など地域の公的施設を会場に目的別に集うことによりニーズ把握や安否確認、情報共有などを行います。

ふれあい食事 (会食)サービス

ボランティアの協力により高齢者や障がい者、外国籍住民とのふれあい交流を図ります。



世代間交流

地域の高齢者から昔遊びを教わったり、戦争体験や昔の生活の様子を聞くなど、子どもと高齢者とのふれあい交流の場。学校との協働で子どもたちや地域住民に対する福祉教育の場でもあります。



いきいきサロン

高齢者、障がい者、子育て中の親や外国籍住民などを対象とし、身近な場所で地域住民・ボランティア・参加者が協働して企画・運営する気軽で楽しい仲間づくりの場。最近では「サロン」や「カフェ」「喫茶」「居場所」など、地域によって親しみやすい様々な名称で呼ばれています。



● サロン活動の 広がり ●

共生型サロンの実施

高齢や障がい、性別、年齢などに関係なく、地域の誰もが集えるサロン。障がいのある方がパンやクッキーなどを販売したり、喫茶で接客をしたりと、就労支援や訓練の場、社会参加の場としての機能も果たしています。



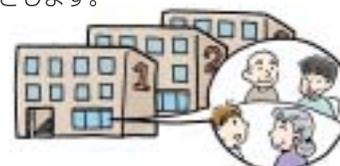
発達に不安がある子どもと親のためのひろば

成長に少し不安がある乳幼児と保護者を対象とした交流の場。子ども総合支援センター等の専門機関の協力を得ることで、相談対応も可能となっています。



マンション交流会(サミット)

マンションや公営住宅など、地域との関わりが薄く、見守り等に課題を抱える住民を対象に交流会の場をつくり、見守りのためのしくみづくりやサロン等の居場所づくりの実現をめざします。



ふれあい喫茶

午前中のモーニングサービスや午後のティータイムにおけるおやつ・コーヒーの提供など、内容、時間帯とも地域性に応じた柔軟な取り組みが特徴です。井戸端会議の復活に貢献し、コミュニティの再生に大きな役割を果たしています。また、介護者家族の会との連携により、介護などの相談に対応している地域もあります。



小地域ネットワークの機能と働き

ニーズ把握、相談

具体的なニーズは何かを把握し、相談に応じます。ニーズは変化していくので、そのたびにしっかりと把握します。



早期発見

問題を早期に発見し、その進行や容態の悪化をくい止められたこともあります。緊急時の対応マニュアルがあれば安心です。



予知・予防

問題はなるべく未然に防ぎたい。活動が成熟するにつれて予知・予防が課題になってきます。



情報発信

チラシや広報紙、HP等のツールを使って、地域に必要な情報を届けます。



精神面における支え

当事者やその家族が地域社会から孤立するのを防ぎ、誰かが見守ってくれているという安心感を持ちながら同じ地域社会の一員として支えていくことが大切です。



問題提起

対応する制度やサービスがなかったり、不足していたり、利用上の改善が必要な場合には、個別ケースを通じた具体的、現実的な提起をしていきます。



関係機関・団体との連携

当事者の日常生活に関わる様々な関係機関や団体との連携を深めていくことが大切です。



社会参加の促進

身体等の障がいによる当事者や社会的に孤立しているため、コミュニケーションをとりにくくなった当事者の社会参加をいろいろな形で促進します。



福祉のまちづくりの推進

住民自身が福祉課題を理解し、活動参加への熱意と行動力を持つきっかけに。小地域ネットワークが要援護者のすべてに張られているような町こそ「福祉のまち」といえます。研修会やワークショップの開催も効果的です。



小地域ネットワーク活動をする際のポイント

① 役割分担

項目	担当	補佐	連絡事項
見守り	〇〇	☆☆
相談	△△	□□
サービス	☆☆	△△
訪問	□□	〇〇



無理をせず、自分たちのペースで。うまく分担しながら、継続して取り組むことが大切です。

② 調査



地域の中で、どんな困りごとがあるのかを調べ集めることで、地域に必要な新たな取り組みが見えてくるかもしれません。

③ 伝える

当事者の声や想いは、地域住民や行政に届いていますか?届いていなければその声を代弁する、伝えることも大事な役割です。



④ デザインする



どんなまちにしたいか?をみんなで考え、実践し、デザインしていきましょう。

⑤ 自分自身も楽しむ

続けていくためには、自分自身が楽しむことが重要です。趣味や特技を活かして、自分もみんなも、それぞれが楽しみながらチカラを発揮できる場を作りましょう。



小地域ネットワークの可能性

拠点

～民家を活用した地域活動拠点～

地区福祉委員会や介護者家族の会などが協力し、民家を活用したお茶のみ休憩所を運営。いつでも誰でも立ち寄れる居心地の良さが好評です。

府内では、こうした地域の拠点を活用した居場所づくりが広がりを見せており、運営に学生や当事者、専門職が加わるなどスタイルも様々で、孤立防止の活動として定着しています。



いきがい ～新入生の学校生活を支える取り組み～

小学一年生が入学後、集団生活に慣れるまで、地区福祉委員やPTAなどの地域住民が授業や学校生活をサポートしています。できる時間帯を交代で関わることで、新たな協力者も増えています。顔の見える関係が広がり、地域活動の活性化にもつながっています。



調査

～空き室調査から集合住宅(マンション)の見守り強化～

ある集合住宅では、郵便物がたまったままになっている部屋がたくさんあり、空き室なのか、見守りの必要のある人が住んでいるのかわかりません。そこで空き室状況を調査するために社協、地区福祉委員、民生委員・児童委員などが協力して調査を実施。その結果、より丁寧な声かけや見守り体制をつくることになり、新たな交流の場も生まれました。



福祉施設との連携

～協働のチカラで地域全体を巻き込む～

地区福祉委員会が協力し、車椅子体験を小学校で学年限定で行っていましたが、「もっとたくさんの人に知って欲しい」との福祉委員の想いを受け、地元の福祉施設連絡会に協力を依頼。そこへ地域の関係団体も加わり、それぞれの得意分野を活かし、地域のみなが参加できる体験イベントに。これをきっかけに、新たな協働の取り組みが次々と生まれています。



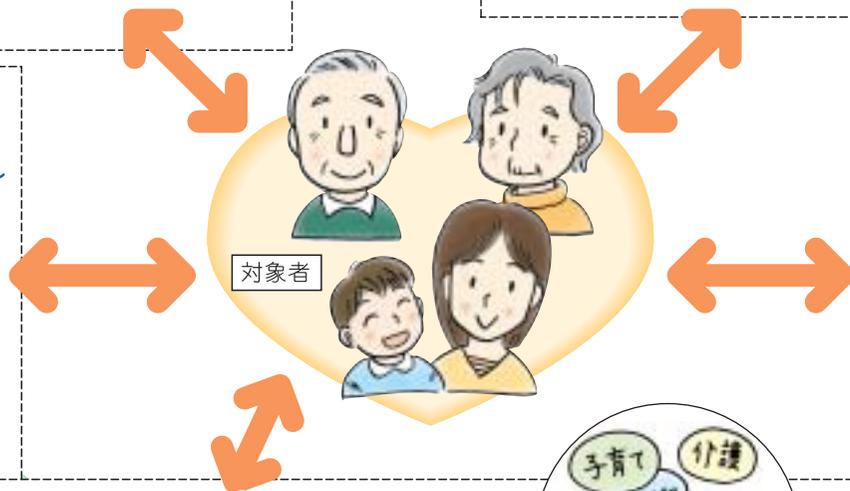
開発

～元気高齢者の社会参加。
地域に足りないサービスは自分たちで作り出す!～

自治会と地区福祉委員会が協力して、町の課題についてアンケートを実施。買物や通院など移動に関する困りごとの支援を中心に、買物ツアーや朝市、認知症予防講習会での憩いの場の支援、スマホの使い方や年賀状作成といったIT支援など、生活支援のしくみを開発しました。



地区福祉委員の声：住民からは「安心して穏やかに毎日が暮らせるようになった」「自分も地域の一員としての存在感が持てて嬉しい」などの声が寄せられています。困ったときに身近な仲間で助け合えることが、今改めて求められています。



小地域ネットワーク活動事例

①会食会がくれたパワーを活かして、手芸教室開催！

週末に行なわれている会食会は地域の憩いの場。家に閉じこもりがちで、ふさぎこんでいたTさん。地区福祉委員のFさんが会食会に誘ったのをきっかけに、今では毎回参加。近隣のお話仲間もたくさんでき、地域の行事にも積極的に参加するようになりました。



Tさんの声：外に出ることがおっくうで、気がつけば一日も出ない日が続いていました。会食会に参加するようになって、お友だちもでき、昔していた手芸教室を再開するようになりました。

②週5日の配食サービスでSOSをキャッチ

寝たきりのSさんは、週5日、地域の配食サービスを受けています。最近、お弁当を残し気味で少し元気がないのではと心配になったボランティアのMさん。翌日、他のボランティアNさんがSさんを訪問したところやはりいつもと様子がおかしいと感じ、社協を通じて家族と病院へ連絡。肺炎を引き起こしていたSさんは一命をとりとめました。



Nさんの声：Sさんにはほぼ毎日、配食サービスを通じて見守りをしています。

Sさんのちょっとした変化も見逃さずにキャッチできたことに日々の積み重ねの成果だと実感しました。

③見守り対象者拡大が福祉のまちづくり推進のきっかけに

ある地域で、数ヶ月の間に孤独死が相次ぎました。亡くなられたのは、40代の失業中の方と、ひとりぐらしのアルコール依存症の方でした。これをきっかけに高齢者を中心に見守り活動をしていたT地区では、対象者を拡大する検討を行いました。



T地区福祉委員の声：この悲しい事件をきっかけにして、地域には見守る必要のある方が高齢者以外にもいるという、地区福祉委員の意識改革になりました。今後は地域で支援を必要としながらも見過ごされている人の把握にも努めたいと思います。

④まちかど福祉相談所(CSW)との連携でひきこもり生活からの脱却と新たなスタートを支援

職場内の人間関係が原因で退職し、精神的に不安定になってしまったこともあいまって自宅にひきこもるようになったAさん。10年たってようやく何かをはじめたいと思えたところを地区福祉委員のBさんがサポート。まちかど福祉相談所で相談を受けとめ、地区福祉委員会が月に1回実施する子育てサロンでのボランティア活動につながりました。



B地区福祉委員の声：この相談から、ボランティアを紹介するだけでなく自立を応援するのが私たちの役割だと実感しました。Aさんが参加するにつれて元気になり、表情が柔らかくなっていく姿を見るのはとても嬉しく、気軽に相談できる身近な存在として、これからも地域で支援を必要とされている方々に寄り添っていきたいと思います。